

水と土の芸術祭2018
市民プロジェクトの記録

葦漣2018

記録集について

葦潟 ashigata

新潟市には葦沼(あしぬま)といわれる
潟や沼、低湿地の土地がありました。

その地で、弱くはあるが
「考える葦である」*人は
水と土と共に、生きてきました。

新潟の自然が生み出した潟と同じように
人もまた多様な生活や文化を
新潟で育んできたと思います。

今、葦沼はほとんど残っていません。

しかし「葦」たちはこの地で今も、
サワサワと音を立てて
ここに新潟あり、と私たちに伝えています。

先人たちが付けてきた足跡=足形の
軌跡の先に新たな足形をここに刻みます。

この記録集は、水と土の芸術祭2018市民プロジェクトの記録をまとめた記録集です。

水と土の芸術祭は、2009年から新潟市内各所で現代アートの作品展示、パフォーマンス、ワークショップ、シンポジウムなど、様々なプログラムを3年に1度の間隔で開催しています。中でも市民が主体的に企画・運営する【市民プロジェクト】は、この芸術祭の象徴であり、他の芸術祭にはない特異な点です。2018年の芸術祭では、公募によって選ばれた82の市民プロジェクトが開催されました。

新潟市には、市民が創造性豊かに築き上げてきた素晴らしい文化・歴史があります。それらを受け継ぎ、また新たな文化を生み出しながら、地域に根ざした活動を行っている市民が沢山います。その熱意が水と土の芸術祭の市民プロジェクトで顕在化しています。

彼らはなぜ市民プロジェクトを行ったのか、その想いは何か、伝えたいことは何か。この記録集を制作するにあたって、それらを記録し、多くの人に発信したいと思いました。そうすることで、新潟市と市民が主役である水と土の芸術祭の魅力を多くの人に伝えるとともに、芸術祭で起きたことを後世に伝えられるのではないかと考えました。

市民プロジェクトは、どれもひとつひとつが光り輝く珠玉の物語です。そこには、観光ガイドブック等では知ることができない新潟市の魅力が多く詰まっています。この記録集が、皆様にとって、新潟市の魅力の発見と、文化の担い手になるきっかけになってほしいです。そして、人と人が文化・芸術でつながってほしいです。そのつながりが、新潟市の魅力をさらに輝かせ、新たな歴史を築き上げていくと信じています。

※【人間は考える葦である】 フランスの思想家、ブレイズ・パスカル氏の「パンセ」の中の言葉。「人間は自然のうちで最も弱い葦の一茎にすぎない、だがそれは考える葦である」自然の中では弱い人間の本質を、思考する存在として表現したものの。

水と土の芸術祭2018について

基本理念

“私たちはどこから来て、どこへ行くのか～新潟の水と土から、過去と現在（いま）を見つめ、未来を考える～”

水と土の芸術祭は政令市新潟の一体感醸成と交流人口の拡大を目的に、過去3回にわたり開催してきました。

信濃川と阿賀野川という二つの大河が運ぶ「水と土」から生まれた地勢の成り立ちや新潟の豊かな暮らし文化など、地域の宝を掘り起こし、先人たちが不屈の精神と創造性を発揮し、自然との共生の中で作り上げてきた今の豊かな新潟市の成り立ちを、現在を生きる私たちが見つめ直し、未来を考えるきっかけとしたいという思いが込められている芸術祭です。

第4回目となる今回の水と土の芸術祭2018は、初回から変わらぬ基本理念のもと、新潟開港150周年記念事業の一つとして2018年7月14日から10月8日までの87日間にわたり、市民プロジェクト、こどもプロジェクト、アートプロジェクト、シンポジウム、にいがたJIMAN等を開催しました。

■市民プロジェクト

市民自らが企画・運営するイベントやプロジェクト等

■こどもプロジェクト

次代を担うこどもたちの創造性を育む事業

■アートプロジェクト

アーティストを招へいするなどし、新潟の地勢的な成り立ちや暮らし文化に深く根差した芸術性の高い作品を制作・展示

■シンポジウム

芸術祭の取り組みと連動したトークイベント等

■にいがたJIMAN

「食」や「農」・「伝統芸能」など、新潟の誇る豊かな文化を広くPR

市民プロジェクトについて

市民自ら企画・運営を行う、市民と地域が主役のプロジェクトです。

公募によって選ばれた、「水と土」をテーマとした82もの多様で多彩なプロジェクトには、新潟に生まれ、新潟で暮らす市民だからこそ見える歴史や暮らし文化の魅力が詰まっています。

今回の芸術祭では、それぞれのプロジェクトの連携やアートを活用して地域の課題に取り組む「地域拠点プロジェクト」を立ち上げ、新たな可能性にもチャレンジしています。

これまでを通して私たち市民サポーターズが見てきた市民プロジェクトは、前述にあった通り多様で多彩なものです。市民プロジェクトがはじまる前から活動している団体もいれば、新たに活動をはじめの団体もあります。活動を行う背景も、経験値も、着眼点もそれぞれ異なります。そのような彼らの表現

は、当然ながらそれぞれ異なります。そのことも市民プロジェクトの面白いところです。そのおかげで、市民でさえ知らなかった「新潟市」に出会うことができます。言うなれば、ひとりひとりが市民プロジェクトのディレクターであり、新潟市のプロデューサーだと言っても過言ではないと思っています。

市民プロジェクトを例えるなら木のようなものです。木はゆっくり育つものです。文化と同じようにです。少しずつ少しずつ成長し、大きな木になって、花を咲かせます。その花が、関係者だけではなく地域の人、地域の外の人、今まで知らなかった人を呼び始めます。いずれその木々の花は実に代わり、その実を誰かが受け取り、今度はその人たちが育て、芽を出し、花を咲かせ、また実を結ぶことになるはずで、その循環を多くの人に見てほしいとともに、応援してほしいと思います。

水と土の芸術祭市民サポーターズ代表 水と土の芸術祭2018副実行委員長 平岩 史行



水と土の芸術祭市民プロジェクトは、新潟市の文化づくりや継承を行う団体の「見える化」なのではないだろうか。

もちろん市内の全ての団体が参加しているわけではありませんが、それでも2018年には82のプロジェクトが実施されました。その数は驚くべきものです。

多くの人たちが、何かしらの思い、目的、目標を持って、仕事や生活以外の時間に労力とお金を費やしています。それは何のためで、何になるのか。そう疑問に思う方も多くいることでしょう。現に、文化や芸術はお金（＝収益）にならない、観光客や交流人口を増加させなければ意味がないと言われることがあります。また、市民プロジェクトはアートではないと言われることもあります。もちろんそれらの評価も重要です。ですが、それだけで評価してはならないと思います。

今、当たり前のようにある文化は、つくる人がいて、受け継ぐ人がいて、長い歳月を経て、世代を超えて、存在しています。もし、受け継ぐ人がいなくなれば消えてしまいます。その思いも、こめられた願いも、大切なことも。

もし、文化を失ってしまったとしたら、その地域にどんな個性や魅力が残るのでしょうか。その地域が大切にしてきたものを失ってしまったら、どんなことが起きてしまうのでしょうか。逆に、地域に新しい価値を持った文化が生まれたら、今ある文化が磨きなおされたらどうでしょうか。きっと魅力的な地域になるのではないのでしょうか。観光客や交流人口を増やすためには、まずは私たちが私たちの地域

に新しい魅力・価値をつくること、今あるものを磨きなおすことが必要なのではないのでしょうか。

水と土の芸術祭は、芸術祭という大きな枠組みの中で、市民が自ら新潟市の文化をつくり、守り、磨き、新たな地域の魅力を生み出す試みを実践できる芸術祭だと思います。また、芸術祭を通して文化活動をしている人や地域に出会えます。そして、芸術祭という大きな枠組みだからこそ、多くの人に発信することができると思います。そういったことから水と土の芸術祭市民プロジェクトは、新潟市の文化づくりや継承を行う団体の「見える化」でもあると思っています。そして、この記録集「葦蕩」も。

いつか、この記録集「葦蕩」に、まだこの世に生を受けていない人たちが出会い、自分たちの地域が、彼らの挑戦の上にあることを知る日が来ることを心から願うとともに、楽しみにしたいと思います。

そのために、これからも彼らの活動が継続し、そしてまた新たに活動を始める人が現れ、新たな文化が生まれ、新潟市が魅力溢れる地域になること心から願うとともに、私もまたその一人として活動していきたいと思っています。

結びに、この記録集は、水と土の芸術祭市民サポーターズが起案し、中心となって、各市民プロジェクト団体と水と土の芸術祭実行委員会事務局の協力を得て制作しました。制作に関わってくださった皆様、応援してくださった皆様、この記録集を読んでくださる皆様、そして水と土の芸術祭を始めた篠田昭様（前新潟市長）に心から御礼申し上げます。



水と土の芸術祭2018

市民プロジェクト・ディレクター 藤 浩志 (秋田公立美術大学副学長、美術家)

小学6年生だったと思う。夏休みの工作の宿題があったが僕はなかなか作れないでいた。いまでも何かをつくるとなるとギリギリまで悩む。実は悩むのが楽しい。悩んでいるうちはなにができるか、可能性は100%だ。どちらかという器用な方だったし、集中力には自信がある。作り出したら高熱も忘れるほど没頭できる。何をつくるか、木で組み上げるか、机に溜め込んだ歴代の拾い物をつかって何かをつくるか、庭でみつけたトカゲの卵で何かをつくるか。そんな時、いつもは休日でも家にいない父親がお昼ぐらいに戻ってきて夏休みの工作を手伝ってやろうかと話しかけてきた。父はいつも出張で家にいないので話らしいことをしたことがない。それほど父親のことが苦手ではなかったが、なにかぎこちない関係になっていた頃だった。父の勤め先に木工と鉄鋼ができる小さな工場があり、そこに連れて行ってもらい木工で夏休みの工作をすることになった。工場に落ちている木材の破片を拾い、何か動物をつくることになった。僕はトカゲの卵のイメージから何か恐竜の子どものような動くおもちゃをつくりたいと説明した。大型の糸のこ盤があり、僕が書いた形を父親が切ってくれるという。本当は僕が切りたかったが父親は危険だからといって僕に機械を触らせてくれなかった。恐竜の首と羽と尻尾が動くようなものを作ろうと仕掛けに凝ってしまい、アイデアがまとまらず夕暮れになり完成しないまま家に戻った。それなりに楽しく過ごせたとし、久しぶりに父親

と会話できたのでちょっとだけ嬉しかった。夏休みの宿題はあと二日ぐらいでどうにかなるだろうと思っていたのだが次の夕方、父親が動く恐竜を完成させて持って帰ってきた。どう見ても小学生の工作レベルではない。僕はショックを受けた。作り始めたら止まらなかつたらしい。これが生涯続く父親との大きな溝ができた瞬間だった。僕は動く恐竜の子どものおもちゃが欲しかったわけではない。欲しいわけがない。6年生だ。動く恐竜のおもちゃが作りたかったのだ。それを父親は一切理解できなかった。完成したガンダムのプラモデルをもらって誰が嬉しいだろうか。危険だからと代わりに旅行に行ってくれるよとイタリアまで行って帰ってきてその苦労話を聞いても嬉しくない。専門家やどこかのコンサルタントがあなたにぴったりの街を作ってあげますよともらってもなんにも面白くない。作る時間を共有し、出来上がる期待に胸弾ませ、価値観を共有できる仲間と議論し、美味しい酒を飲み交わし、あーでもない、こーでもないで過ごす時間が楽しいから生きている。試合に負けて悔しいから次の試合は勝とうと頑張れる。失敗するから次に成功しようと希望が生まれる。もっと凄い人と出会えるかもと未来が広がる。活動はつくることそのものが楽しいし、許しあえる人たちと過ごせるから価値がある。人生の時間を輝かせることができる。あの悔しい思いがなければこんな風には考えなかったのかもしれないなあ。

水と土の芸術祭市民サポーターズについて

水と土の芸術祭を応援する有志市民により組織され、多くの方に芸術祭や新潟市の文化芸術に興味を持っていただきたい、文化芸術活動をしている人をサポートしたいという想いから活動しています。また、芸術祭の実行委員会の構成団体でもあり、芸術祭を実質的に支援しています。今後は、市民主導での芸術祭開催の可能性を模索します。

構成メンバーの多くは社会人であることから、平日の夜や土日を中心に活動しています。活動にあたり自分たちも楽しむこと、やれること・やりたいことをやるということを大事にしており、メンバーが市民プロジェクトを行うこともあります。毎週行っている定例会ではメンバーの一人が夕食を作ってきてくださり、白熱しそうな議題でもその温かい夕食が緩衝剤となり、良い雰囲気を保ちながら、建設的な打ち合わせが行えています。

主な活動は、情報発信（広報活動）、アーティストと市民団体の支援、制作協力、ガイド、来訪者へのおもてなし、独自企画の実施、市民プロジェクトの記録集「葦潟」の制作、新潟市との連携等多岐に渡り、芸術祭会期外も行っています。

それらの活動から2018年に実施した活動をいくつか紹介します。

■情報発信

- ・情報発信ブースの運営（芸術祭メイン会場、西堀ローサ）
- ・芸術祭メイン会場にご来場いただいたお客様へおもてなしのご案内
- ・SNS等での情報発信（Facebook、ホームページ）
- ・芸術祭開幕100日前からのカウントダウン
- ・各種イベント会場での芸術祭PR

■独自企画

- ・市民プロジェクトの記録「葦潟」制作
- ・全国芸術祭サポーターズミーティング
- ・その他イベント（ワークショップ、トークイベント、芸術祭ガイド等）

■新潟市との連携

- ・副実行委員長 兼 企画部会長
- ・市民プロジェクト企画発表会および報告会
- ・その他（芸術祭ガイド、公式ポスターの撮影協力等）

私と水と土の芸術祭

～「編集者の想い」の代わりに～

藤原 恂子（ふじわら じゅんこ）

私たち夫婦は、それぞれ異なった趣味を持ち、週末は各々行動をすることがあります。ですが、水と土の芸術祭と出会い、夫と一緒に芸術祭を回るようになりました。様々な場所で新潟の宝に出会い、同じ価値を持って感想を語り合うことが楽しくなり、さらに夫婦円満になりました。ありがとうございました。芸術祭で特に印象に残ったことをいくつか紹介します。

1. 潟 / 新潟の潟にはホタルが飛び交うじゅんさい池や市街地と隣接して海より3mも水面の低い鳥屋野潟、鮭も上って来ることができ、稚魚の放流も行っている上堰潟、天然記念物のオオヒシクイや白鳥が多く訪れ、オニバスの花の北限地でもある福島潟等々、潟は季節ごとに姿を変え、春には桜並木や菜の花畑、夏には蓮の花、秋には巨大アートと紅葉、冬には澄みきった雪景色の越後の山々、一年を通じ自然の美しさを楽しませてくれます。

潟は、水の都である新潟市の宝、財産でもあると思います。おにぎりや水筒、タオルを持って楽しめたらいかがでしょうか。

2. 礎窯 / 新潟市中央区の礎窯（旧礎保育園）では、粘土で思い思いの形の容器や備品を作り、皆の協力と努力で作られた窯に入れ、3日3晩交代で寝ずに薪を焚き、温度を調節しながら焼き上げ、苦労してできた作品を展示したり、銘々が作ったお茶碗でお茶会を楽しんだり、全員で夕食を作って和気あいあいの親睦会を行ったりしました。参加者がまるで大家族のようで、互いに協力するすばらしさに感動いっぱいになり、今でも余韻が残っています。とても楽しいイベントでした。参加できて感謝いっぱいです。

3. 天昌堂 / 南区白根にある空き店舗を活用した天昌堂では、誰もが気楽に行ける雰囲気があり、内部には高齢者の運動不足を解消できる設備「輪投げ」「ダーツ」「コマ回し」「ジャングルジム」等々がセットされていて、とても楽しく、これからのお茶の間のあり方の様に感じました。

4. 小須戸 / 秋葉区小須戸では小須戸ARTプロジェクトが開催されました。町の中心部にある10軒の商店街等にアート作品が展示されました。町屋ギャラリー薩摩屋さんでは、身長ほどの大きさの顔の絵が数点展示されており、すばらしい笑顔写真だと思えばよくよく見ましたら鉛筆1本のみで描かれた絵であることを知り、驚くと同時に大変感動しました。歴史と文化がいっぱいの古い町並みにアート作品を展示し、アートを通して町おこしに取り組む姿は素晴らしく、とても感動しました。

制作について

この記録集の制作は、前回の水と土の芸術祭2015に続き、水と土の芸術祭を市民の立場から支える「水と土の芸術祭市民サポーターズ」（芸術祭の実行委員会の構成団体）が企画し、各市民プロジェクト団体の皆様と、芸術祭実行委員会事務局からご協力をいただきながら制作しました（助成金・補助金はいただいておりません）。

記録集の構想は、水と土の芸術祭2015の会期後に、当時の代表・本間智美と、現代表・平岩史行の2名から湧き出しました。

芸術祭という枠組みの中で市民が自ら行う市民プロジェクトの素晴らしさに感銘を受け、「もっと多くの人に知ってもらいたい」「彼らの想いを後世に伝えたい」という思いから「やろうよ！」と声を発しました。

制作は、決して容易なものではありませんでした。葦潟2015の制作期間は半年かかりました。2016年と2017年に行われた水と土の文化創造都市市民プロジェクトの記録集は、制作を断念しました。

制作以外に、資金集め、広報、販売も行う必要があり、サポーターズとしての活動に加えて、それらを行うのはとても大きな労力が必要でした。葦潟の制作は、ボランティアの域を大きく超えたものでした。制作スタッフの確保も困難でした。

それでも、水と土の芸術祭2018市民プロジェクトの記録集を制作したいという思いがサポーターズ内部から湧き上がり、挑戦し、制作したのが『葦潟2018』です。制作にあたっての思いは2015と変わりません。

私たちが「やろうよ！」という思いを持つことと同じように、各市民プロジェクト団体もまたそこからプロジェクトを立ち上げているはずだと思っています。「やろうよ！」から実行までの道のりもまたそれぞれ大変な苦勞が伴っています。それでも「やろうよ！」から「やる！」その姿勢は、まさに市民プロジェクトそのものです。『葦潟2018』を通して、改めて各市民プロジェクトが注目され、それぞれの活動の広報に少しでも役に立てれば幸いです。

2019年3月1日 Web版発行

新潟市民が主役の水と土の芸術祭2018
市民プロジェクトの記録

葦蕩 -ashigata2018-

発行：水と土の芸術祭市民サポーターズ
E-Mail：ashigata.niigata@gmail.com
<http://mizutsuchi.com>

編集：

平岩 史行（水と土の芸術祭市民サポーターズ代表）
小林 美果（同副代表）
本間 和人（同副代表）
蟻川小百合
桐生 信子
高橋 秀彰
藤原 恂子

執筆・協力：

水と土の芸術祭2018実行委員会事務局
市民プロジェクト実施団体のみなさま
藤 浩志（水と土の芸術祭2018 市民プロジェクト・ディレクター／こどもプロジェクト・ディレクター）

本Web版の情報は、2019年2月28日までの情報により構成されています。
お問い合わせは、水と土の芸術祭市民サポーターズまで。

©水と土の芸術祭市民サポーターズ
掲載されている内容を無断で転載、複写することを禁じます。